新年あけましておめでとうございます。
今年もどうぞよろしくお願いいたします。
お隣り、前後ろの方々にも挨拶いたしましょうか。
はい、では、賛美を共に献げていきましょう。
聖歌４８０です。

「歌となる神への身もだえ」

ハバクク書３：１７－１９

January.1.2024

ハバクク書３：１７－１９（パワポ）

Preface

いつの時代にあっても、私たち人間にとって、最も大きな根幹的なテーマとなって来たのは、「神はいるのか、いないのか？」ということではないでしょうか。

「神がいるならば、何でこんなひどいことが起こるのか？」、「神がいるならば、何でこんな無惨なことが起こるのだろうか？」、「神がいるならば、何でこんな不幸に見舞われるのか？」、「神がいるならば、何で弱者がいて、強者がいるのか？」、「神がいるならば、何で差別があり、富む者がいて、貧しいものがいるのか？」

そして、これらの疑問と共に、大概行き着くところは、「だから神はいない、いるはずがない」というところのように思います。

こういう疑念のような思いを持つのは、何もまだクリスチャンではない方々ばかりではなく、クリスチャンも同じような疑問を抱きながら、もがき、あがき、身もだえすることがあります。

「神さま、どこにいるんですか？　神さまなんですか！　神さま、あなたは本当に存在しているのですか？」というような疑いの気持ちですね。

ハバクク書は正に、その神を信じる者の疑念の極みを、そのまま記しているかのような聖書です。

Part One

今年の主題聖句は、ハバクク書からの御言葉、先程お読みしましたハバクク書３：１７－１９の御言葉と致しました。

もう一度お読みいたします。

ハバクク書３：１７－１９（パワポ）

「いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木には実りがなく、オリーブの木も実がなく、畑は食物を生み出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる」

というのは、私たち人間が生きて行く上であってもなくても良いようなものではなく、装飾品やアクセサリーのようなものでもありません。
　無くては生きていけない、生存のために必要な、この肉体を保つために必ず必要な必需品です。
　命に直結するもの、口に入る食べ物たちです。

　それら命に直結するものが無かったとしても、つまり、死を覚悟しなければならないような状況でも、喜び躍り、楽しむことが出来る。
　しかも、「そういう中にあってもなお力があり、歩むことが、生きることが出来る」と、ハバククは歓喜のうちに賛美を献げております。
　そして、その賛美の根拠が、「神である」と、「救いの神であられる主なる神様である」と告白をします。

　このハバクク書の結論部分だけを見ますと、よく見るよく聞く信仰の話のようなと言いましょうか、ベタなよくある白々しい結論のように、もしかすると思えてしまうかもしれませんが、この歌、この告白に至るまでの経緯は、凄まじいものがありました。

　ハバクク書は、他のどの聖書とも違う特異な、独特な始まり方をします。
　何から始まるかと言いますと、預言者ハバククの神に対する猛烈な訴え、反論、抗弁、不服申し立てから始まります。

ハバクク書１：２－４（パワポ）

　「神さま、あなたは一体全体、何をしているんですか！」
　「何をボケーッと突っ立ってるんですか！」
　「神様あなたは、こんな凄惨な状況を目の当たりにしても、何も感じないんですか！」という痛烈な神様批判から始まっています。
　雨と晴れ、苦いと甘い、夜と昼、不幸と幸福、死と生のように、ハバクク書の最後の言葉３：１７－１９の賛美とは、真逆の内容のように見えるほどのハバククの嘆きから、ハバクク書は始まります。
　でも、ここから私たちが一つ教えられるとても大事なことは、信仰とは、真剣であればあるほど、神への嘆きと神への喜びが一緒に行く・同伴するということではないでしょうか。

　雨と晴れも、苦いと甘いも、夜と昼も、不幸と幸福も、死と生も、それぞれ皆相反しているようで、背中合わせでくっ付いていて決して離れることの出来ない関係であります。
　雨があって晴れの価値があり、苦いがあるから甘いが分かり、夜があるから昼に期待を持て、不幸があるから幸福を感じ、死があるから生に対する渇望があるように、神を信じることにおいても、嘆きと喜びは一緒にあっていいんだと、い

やむしろ、嘆きと喜びが一緒にあるのが信仰であり、信仰生活であり、神との関係がより深められていく道筋なんだということを、ハバククは自らのみならず、私たちにも、その身をもって示してくれているように思います。

神さまは、ハバククという一人の預言者の生き様を通して、すべてのクリスチャンたちに、神を求める者たちに、罪人である私たち人間が神を真剣に信じ続けようとする時、嘆きと喜びが一緒にあって当然なんだというとても大事なことを教えて下さっているような気が致します。

正直、いつも喜んでなんかいられないのが、私たちの素の姿でもあると思います。
でも、このハバクク書を通して示されている内容ゆえに、私たちは安心して絶望できますし、安心して嘆くことが出来ますし、安心して泣くことが出来ますし、安心してブーたれることが出来ますし、安心して恐れることが出来ます。
また逆に、安心して喜ぶことが出来ますし、安心して感謝することが出来ますし、安心して幸いを享受することが出来ますし、安心して与えることが出来ますし、安心して賛美することが、祈ることが、礼拝を献げることが出来ます。

神への真剣な嘆きと神への真剣な喜びとは、表裏一体であり、信仰そのものであるでしょう。
キリストを信じ、聖霊に触れられると、私たちに表れる一つの霊的症状があるように思いますが、それは、それ以前よりも喜怒哀楽の表現において豊かになるということです。
人はこうあるべきだ、男はこうあるべきだ、女はこうあるべきだ（ちょっと古いかもしれませんが）、親は子はこうあるべきだ等の「あるべきだ」という枠から・束縛からの解放も、主イエス様を信じられるようになりますと、人のうちに起こるような気が致します。

私たちの周りにも、そういう方いませんか？
以前は、しかめっ面が多かったけれども、イエス様に触れられ出会ったら、安心して笑うように、泣くようになった方がですね。
私自身もそのうちの一人のような気が致します。

Part Two

ハバクク書は、たった３章、節にしてみますと５６節しかない短い聖書・書物ですが、そこには時間の推移、感情の浮き沈み、反発と理解、そして歴史の胎動などの壮大なストーリーが描かれています。
その構成は、預言者ハバククと主なる神さまとの２度の大きな質疑応答と、ハバククの最終的な応答としての賛美・祈りで構成されています。

小さな一預言書でありますが、その重要性は決して単純なものであったり、軽

いものではありません。
　あの使徒パウロが、キリスト教信仰、またはキリスト教神学の大黒柱のようなものを打ち立てるにあたって、２度も、ハバクク書の御言葉をその根拠として用いて行きました。
　ローマ書１：１７とガラテヤ書３：１１においてそれぞれ、「義人は信仰によって生きる」というハバクク書２：４の御言葉を引用しながら、キリスト教信仰、キリスト教神学の土台を据えました。

　また、ヘブル書の著者は、ヘブル書１０：３８で、世の終わりを生きる私たちキリスト者たちが生きて行く生き方の原理を明らかにするために、パウロと同じように、ハバクク書２：４の「義人は信仰によって生きる」という御言葉を引用しております。

　さらには、伝統や人の語った言葉や建物の荘厳さ等に頼るのではなく、聖書の御言葉に依り頼む信仰、教会、クリスチャンであることを改めて立て直そうと立ち上がった私たちプロテスタント教会の祖であるマルチン・ルターも、使徒パウロがローマ書で引用したハバクク書２：４の御言葉「義人は信仰によって生きる」という言葉に魂を打たれ、宗教改革を興して行きました。
　つまりは、私たちキリスト者の心が、核が、土台が、生き方が、このハバクク書に記されているということにもなるでしょう。

Part Three

　で、このハバクク書を三回に分けて、元旦礼拝の今日と、新年礼拝の来週と、その次の週に渡って見ていきたいと思っておりますが、先ず今日は、ハバクク書１章の内容について考えてみたいと思います。

　ハバクク１章に敢えて題をつけるならば、「食ってかかる不服申し立て」と言ってもいいかもしれません。
　ハバクク書以外の聖書の中の預言書は大概、神から人への語り掛け、またはチャレンジからその話が展開していきますが、先程も言いましたように、ハバクク書は、人から神への訴え、チャレンジ、挑みから始まっていきます。

　人生の現場において、信仰が通じないということに対する不満を神にぶちまけていくんです。
　即ち、神さまが統治しておられるだろう社会の、世の中の状況が、私の考える神観、「神さまが神さまならば、このようにして下さるだろう。神が神ならば、当然のように問題の糸口をこのように解いて行かれるだろう」と期待していることとは全然違う状況が目の前に広がっており、予想もしない方法で問題を解決しようとなさっておられる神様に、「あなた本当に神ですか？　あなた本当に義をなさるお方ですか？　あなた本当に私たちのことを愛しておられますか？」という苦痛の訴えですね。

信仰が通じない現実を前にしている苦痛ですね。

ハバククは今、二つのことで悩んでおります。

一つ目は、神さまがこの現実世界を統治しておられるだろう思われる証拠のようなものが見当たらないということです。
「神さまの御言葉や神さまの品性、神さまが愛なるお方であるということが全く感じられないように世の中回っている。
それなのに、神さまあなたは、あたかもそれが見えていないかのようにジッとしておられるんですね。
ジッとしているから、世の中こんなことになっちゃってんじゃないですか！」と、ハバククは、神さまのことが理解出来ないんですね。

二つ目は、神様は祈りに応えて下さる方だと思っていたけれども、祈りに応えて下さっているという実感がないということです。
こんなにも不条理で、不義な人間模様という現実を前にして、ハバククは神に嘆きながら祈るのですが、あたかも神様には耳がないかのように、祈りが聞かれているという実感もなく、応答もない。
その熱心な祈りは、あたかも空を打って戻ってくるやまびこのように、自分に戻ってくるだけ。
祈りに応えて下さる神は、どこにおられるのか？
不義と不正が蔓延るねじ曲がった社会・世界への神の無関心、神の国と神の義を求める叫びに対する無応答。
これが、ハバククの人生の現場において直面している問題です。

もちろん、それでもハバククは、はっきりと知り、はっきりと信じています。
何を？
主なる神様は、公義をもって世を統べ治めるお方であり、愛する民の祈りに応えて下さる方であるということをです。
これは、揺るぐことのないハバククの確固たる信仰ですね。

問題は、その信仰が、人生の現場において目に見える形で表れていないということです。
ハバククのその苦悩は、日々の暮らしの中において、自らの神観、神学、信仰が通じない、何の役にも立っていないように感じて仕方がないということです。
信仰と日々の暮らしの乖離。
信仰を持って告白している神さまが、日常の現場において見えない。
信仰を持って自らが告白している神さまと、人生の現場において確認できる神さまとの不一致。
それゆえに、彼は混乱し、呆れていると言いましょうか、苦悩しています。

だからハバククは、「何でこんなことをなさるんですか？　いつまでですか？」と、神さまに対して残念がるんです。

Part Four

そんなハバククに対して、遂に、神さまは応答なさいます。
でも、その応答の内容が、ハバククが期待していたこと、「神さまならば、こうなさるはずだ！」という望みとは、遠くかけ離れた突拍子もない内容でした。

それは、カルデア人、つまり、バビロン帝国を興し、そのバビロン帝国によって不義と不正に満ちたハバククの国イスラエルを綺麗さっぱり滅ぼし尽くすというものでした。

ハバクク書１：５－１１（パワポ）

神さまのハバククの祈りへの応答は、カルデア人・バビロン帝国を動員し、ハバククが訴えている自国イスラエルのあらゆる不正と不義な問題を処理するというものでした。

ところが、どうにもこうにもハバククが納得が行かないのが、自分たちよりも遥かに悪であると思われる者たちによって、自分たちを裁かせようとしていることですね。
こそ泥を取り締まるために警察を動員するならば理解出来るんだけれども、こそ泥を根絶するために、世界一のマフィア組織を、世界一の反社会的勢力を動員して根こそぎにするかのような方法にハバククは感じて仕方がないわけです。

何よりも納得が行かないのは、義なる神様ならば、悪には正義をもって裁くべきであり、悪に対してもっと大きな悪をもって制圧するかのような方法が分からない、納得が行かない、気に食わない、らしくないと思えて仕方がないんです。
だから、神に対する不満、怒りがさらに増長されます。
１２節以降でも、その高ぶった感情を神さまにさらにぶちまけていきます。

ハバクク書１：１２－１７（パワポ）

「いやいや、神様、私たちイスラエル人と誰を比較してくれちゃってるんですか？　あの野蛮で、卑劣で、暴虐そのもののような者たちに比べたら、私たちは善人ですよ。　それぐらい分かりますよね？　あの根っからの悪人、真の悪党どもと私たちイスラエル人を一緒にしないでください！　イスラエルの悪党は、バビロンのカルデア人の悪党たちよりも善良ですよ！」と開き直りながら、
「あんな奴らに、私たちが虫けらのように扱われ、引き網に掛かった魚がすべて焼き魚にされて食べ尽くされるかのように、食べ尽くされて行ってもいいんですか！　冗談じゃありませんよ！　ふざけないでください！」と、神さまに思

いの丈をぶちまけていきます。
　ハバクク書１章の内容は、ひたすらにハバククの抗弁、不服申し立てで満ちています。

Part Five

　私たちもハバククのように、神さまを、イエス様を信じていても、残念に思えて仕方がないと言いましょうか、神さまに対して、深く傷つくような時があるのではないでしょうか。

　私たちの信仰が通用せず、私たちの神学・教理・神観が全くもってそぐわないような人生の現場を生きなければならない時、通らなければならない時、私たちは、神さまに対して残念な思いがし、怒りのような感情が湧き上がってきてしまいます。
　そのような状態が長く続きますと、神さまが慰めとなるのではなく、深い傷になってしまうようなことがあります。
　そして、神さまに嘆き、呻き、訴え、不服申し立てをするようなことがあれば、まだ全くもって、いやむしろ良いことだと思いますが、それさえも出来ない、しない。
　無言を貫き、もう諦めているというようなこともあるのではないでしょうか。

　ハバククは今まさに、「なぜですか？　いつまでですか？」と神さまに激しく抗弁し、嘆願します。
　私たちが日々の暮らしを生きて行く中で経験する問題でもあります。
　「現実がこんなんなのに、神さまは働いておられるのだろうか？
　それでも、信仰生活続けて行かなければならないのだろうか？
　それでも、信仰を持ち続けるべきなのだろうか？」
　これこそ、私たちが信仰者として、クリスチャンとして経験する痛みではないでしょうか？

　ハバククという方は、ある意味とても親しみやすいと言いましょうか、とても近い、生々しい私たち信仰者の姿を持っている方だと思えてきます。
　ハバククの痛みは私たちの痛みでもあり、ハバククの苦悩は私たちの苦悩でもあるように思います。
　ハバククの話は、今日を生きる私たちの話でもありますよね。

　ですが、もっと正確に言いますと、ハバククにとっても私たちにとっても、本質的な悩み苦しみは、今直面しているその問題自体ではないのではないかということが見えてきます。
　苦難と苦悩とやりきれない状況に投げ出されているにもかかわらず、問題の本質となっているのは、何の解決も持っておられないように思える神様の存在そのものです。

いや、解決がないどころか、時には、神さまが、そのような悪い状況をさらに悪化させているようにさえ思えてしまうことですね。

つまり、神さまが問題なのです。
今、ハバククが問題としているのは、その直面している問題ではなく、その問題に対して何の解決も対策も持っていないかのように思えてしまう、また見えてしまう神そのものですね。
神というお方が、その存在そのものが、今ハバククにとって、大きな問題となっています。

ハバクク書は一見しますと、キリストを信じる者たちが通る苦難をテーマにしているように見えますが、そうではなく、実のところ、神という存在そのものをテーマとしています。
「神という存在が、本当に存在するのか？」、「存在するとしたら、一体全体、神というお方は、どういう存在なのか？」ということを主題としている聖書だということが見えてきます。

だから、今年の年間主題聖句のような言葉が、ハバクク書の結論として最後に刻まれてくるわけですね。
主題聖句が壁にかかっていますので、もう一度お読みいたします。
「しかし、私は主にあって喜び躍り、わが救いの神にあって楽しもう。　私の主、神は、私の力。」

ハバクク書のテーマは、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木には実りがなく、オリーブの木も実がなく、畑は食物を生み出さず、羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなるという問題ではなく、新しく出会う神がテーマです。
それまで自分が思い描いていた神像とは違う、いや、もっと深い、もっと高い、もっと広い、もっと長い神に出会うハバククの話であり、私たちの話であり、その出会った神によって、揺るぐことのない満足と幸と平安を実感することです。
「しかし」の神、「しかし」という逆転の神に出会うことです。

Conclusion

「ハバクク書１章に記録されているような神に反発するハバククの姿に倣うことなく、そんなハバククを反面教師として、クリスチャンたる者、正しく信仰生活を送って行かなければなりません」というように語られることがありますが、もちろん、それも間違っていないでしょう。

しかしそれ以上に、いやむしろ、ハバククのように神に反発し、神に対抗し、神に抗弁を垂れるその姿は、正直な姿であり、真剣な姿であり、問題の本質をしっかりと見据えることが出来ている知恵者の姿であり、人として、また信仰者として倣うべき姿ではないでしょうか。

私たちは神さまとどういう関係にあるでしょうか？
「しかし」の神に出会っておられるでしょうか？
私たちが直面するすべての問題を、神と向き合うことによって、その答えを見出そうとしておられるでしょうか？
直面している問題を通して、神との関係を深めることが出来ておられるでしょうか？

私たち人間に覆いかぶさってくるありとあらゆる問題のそのすべての本質は、私たち一人一人と神との関係がどうなのかを問うてくることです。

今年１年が、皆さんにとって、「しかしの神に出会う」、また、深く長く高く広く神を経験する１年となりますようお祈りいたします。

お祈りします。